

あった。しかし、正規の教諭の労働時間は1日11時間超どころか、土日出勤も珍しくない。放課後は教材研究や教材準備の時間にあてたいが、各部署の会議や名簿の作成、学校行事の準備、保護者対応など仕事は山積みだ。

丸つけやノート点検も午後8時に終わればまだ早い方だ。年度初めのこの時期は予

りがきかない。

新任教諭が悩んだ末、自殺したことも過去にあった。先輩教諭も忙しく、悩みに耳を傾ける余裕がない。電通のような犠牲者が出てからでは遅すぎる。教諭の過労死が出ることのないよう、正教員を増員して30人学級の実現も視野に入れてほしい。国や自治体は本腰を入れる時だ。

終末期の「事前指示」を制度に

無職 平野 昭一

(愛知県 73)

米国出身の宗教学者で、京都大学こころの未来研究センター教授（現・京大医学部内政策のための科学ユニット特任教授）のカール・ベッカー氏の講演をラジオで聞いた。

そこで終末期医療の「事前指示」という言葉を教わった。回復の見込みがなくなつた時、延命治療を望むか、望まないか——。どのような最期を迎えたいか、元気なうちにあらかじめ意思表示し、医師に提出しておくというものだった。すでに導入している病院もあるが、これを国で制

度化できないだろうか。

延命治療のありようが問題になって久しいが、私たちが例えば意識不明の重体になった時、医師がどんな治療をすれば本人の希望に沿えるのか、判断がとても難しいのではないだろうか。家族が本人の希望を承知していても、医師に聞き入れられないかもしれない。本人が記した事前指示書があれば、大いに助かるのではないだろうか。

医療費の軽減にもつながるかもしれない。本人の希望に沿った最期を迎えられるよう、ぜひ早急に制度化を図ってもらいたい。